

削除された原稿

——トマス・ウルフの *O Lost* について——

Some Editorial Problems in *Look Homeward, Angel*

岡 本 正 明

要 旨

本論考は、トマス・ウルフの *Look Homeward, Angel* とそのオリジナル原稿 *O Lost* を比較対照することによって、作品の編集・成立過程を考察するものである。なかでも、原稿の「削除」された箇所を当てて比較対照を行うことを目的としている。削除の具体的様相について、主なものを列挙すれば、以下ようになる。(1)「一家の物語」, 「大河小説」的特性にかんする削除。(2)人物の多様性に関連した削除。(3)歴史的・社会的背景の削除。(4)空間的広がりにかんする削除。(5)「政治性」の削除。(6)風俗・文化的要素の削除。(7)百科全書性の削除。(8)小説技法の変容につながる削除。(9)性描写, 差別表現などの削除。

これら編集における基本的枠組みの研究が、いまだ日本においてほとんどなされてはいないという現状をふまえると、本論文での考察は、十分意義あることだと確信する。

キーワード

トマス・ウルフ

はじめに

トマス・ウルフの生誕百年を記念して、2000年、彼の処女作 *Look Homeward, Angel* (以下、*LHA* と略記) の編集前のオリジナル原稿である *O Lost* が出版された (Thomas Wolfe. *O Lost : A Story of the Buried Life*, The original version of *Look Homeward, Angel*, Text established by Arlyn and Matthew J. Bruc-

li. University of South Carolina Press, 2000)。これは、タイプ原稿を手書き原稿と照合しつつ、タイプ原稿に多数見出される字句のミスを修正した、より正確な（作者の意図をより忠実に反映した）オリジナル原稿の決定版である。しかも、それまで主として研究者のあいだで知られていたオリジナル原稿を、一般読者向けに、よりわかりやすい形で提示している点で（たとえば、修正箇所の一覧を巻末に付している）、トマス・ウルフ批評史上画期的な試みである。

この小論は、*O Lost* と *LHA*（スクリブナー社の1929年の初版）を比較対照しながら、*O Lost* から削除された部分に光を当て、その具体的な様相を個別的・詳細に検討することによって、*LHA* の編集、成立過程について考察しようとするものである。それは、ウルフ作品の編集のいわゆる「ハサミと糊」、つまり「カットと貼り（つなぎ）合わせ」から成る編集過程の最大の特徴を明確にしようとするものである。また、*O Lost* の出版以降、*O Lost* と *LHA* を比較対照した論考が日本では（田村理香氏の犀利な論考「自伝的作家の失われた自伝」【『英語青年』、研究社、2001年5月号】を例外として）ほとんど見出されないという現状からみて、今あらためて編集の基本的な枠組みを再確認し、整理し、ここに紹介することは、十分に意義あることだと思われる。

第1章 全体の構図

具体的な「削除」の詳細について述べる前に、まずは、全体的な「削除」の様相、概観について祖述しておこう。

第一に、主人公ユーージン・ガントの父方のガント家と、母方のペントランド家の記述が大幅に削除されていることである。特に、ユーージンの祖父ギルバート・ガントにかんする詳細は削除され、その物語はごく簡単に要約されている。また父オリヴァーの少年時代、および彼の兄弟につい

ての記述もほとんど削除されている。一方、母ジュリア（*LHA*ではエライザという名前に変更されている）の家系であるペントランド家の歴史、母方の親戚であるペントランド家の様々な人物にかんする記述も多く削除されているのである。

このような編集によって、どのような変化が生じたのであろうか。それは、本来、「大河小説」、「叙事詩的サーガ」、「家の誕生と変容と没落の物語」を主眼としていた作品が、ユージーンを中心、焦点とした「教養小説」、「芸術家小説」という作品へと、ジャンルの変容を遂げているということである。編集過程で「家の物語」が「私」中心の物語へと変化してしまったことについては、すでに幾人かの評者が言及、あるいは暗示しているので、これ以上は詳しく述べない（そのなかでも、編者 Matthew Bruccoli が *O Lost* に付した「序文」、および Terry Roberts, “*O Lost* : A family history” [*The Mississippi Quarterly*, 2001/2002, Vol.55, Iss. 1] は出色の論考である)。

第二に、ガント家とペントランド家以外の人物の多様性にかんして。*O Lost* においては夥しい数の多彩な人物が登場するが、それらの人物の多く、あるいは彼らの物語のかなりの部分が *LHA* では削除されている。最も魅力的なキャラクターの多くが、編集者たちが考える物語の主筋から逸脱しているという観点から、削除されているか、またはごく簡単に言及されている。

第三に、*LHA* では、主として20世紀の最初の二十年間の歴史的・社会的背景が描かれているが、*O Lost* では、19世紀（特に南北戦争）についても詳しく言及されているということだ。それによって、人物の家系図的な広がりばかりでなく、小説世界の歴史的・社会的広がりも編集作業によって狭められてしまったのである。アメリカの歴史、社会の壮大なパノラマが、ユージーン一個人の自叙伝的な私的な世界へと変容しているのだ（「家族の、共同体のパノラマ」という言葉は、すでに Matthew Bruccoli が「序文」

の中で用いている)。

第四に、空間的な変容である。*LHA* は、第三部の州立大学での物語を除けば、ほとんどが「アルタモント」という「故郷」の記述に終始している。また、ユージーンを含めたガント家のメンバーたちの、アルタモント以外での様々な物語は、*LHA* ではすべて削除されるか、もしくは大幅に削除される。それによって、物語の空間的な拡がり、多様性もかなり失われてしまうのである。

第五に、政治性。*LHA* は、全体をつうじて政治的な言及はとほしい。しかしながら、*O Lost* を通読すると、随所に政治的な言説が見出される。

第六として、風俗、文化についての言及。*O Lost* では、作品の時代的背景となる風俗、文化（特に映画などの表象文化）についての詳しい言及があるが、そのかなりの部分が *LHA* では削除されている。

第七番目にあげられるのは、百科全書的特性である。*LHA* において夥しい書物のカタログ的記述、そしてジョイスの『ユリシーズ』をおもわせる多数のアリュージョン (allusion 引喩) があることは、よく知られているが、*O Lost* において、それらはさらに多数にのぼっている。*O Lost* においては、百科全書的特性はさらに顕著である。

第八に、小説技法の変容。*LHA* は、冒頭の、ユージーンが生まれる前の記述を除けば、ほとんどが「ユージーン」という「視点人物」からとらえた世界を描き出している。一方、*O Lost* では、ユージーンという視点人物からとらえた世界に局限されず、彼の経験できない多数の物語が、自由自在に介入する語り手によって紹介され、より多元的な世界像が形成される。しかも、冒頭のガント家とペントランド家の大河小説的な記述がかなり続くので、ユージーンが誕生したのちに、作品が視点人物のとらえた世界に限定されていなくても、読者は何ら違和感を覚えないのである。また、*LHA* は技法的には視点人物を設けているが、実際読んだ印象が、多

数の人物のざわめきのように思われるのは、もともと *O Lost* が視点人物の一元的世界に限定されるものではなく、編集後も多元的世界像のなごりをとどめているからであろう。

第九に、性的表現・描写、極端にグロテスクな記述、人種の差別表現の大幅な削除である。*LHA* には、ユージーンの性的な体験、オリヴァーをはじめとする人物らのグロテスクな身体表現、ユダヤ人や黒人にたいする差別的な表現が散見される。しかしながら、*O Lost* においてそれらは、即物性、露骨さの点で、*LHA* とは比較にならない。*O Lost* においては、*LHA* において記されていない性行為の（あるいはそれを象徴的に暗示する）描写が随所に記されており、「死体」の標本の詳細を極めた描写もある。また、差別的表現も多くが削除されている。これらは、おそらく、編集者たちが出版にあたって、より読者が（あるいは社会が）受け入れやすい作品を心がけて削除したのでであろう。特に、当時は、性描写を中心に据えたロレンスやミラーの作品が発禁、あるいは削除の憂き目を見た時代であったので、出版にあたって慎重を期したのでであろう。

以上、主として九つの特徴（それらは全く別々のものではなく、しばしば関係しあっている）について、「削除」の概略について祖述してきた。それら全体を見て言えることは、編集によって、作品は求心的で統一性を有したものになった一方で、その多様性、パノラマ性、豊饒性の一端が失われてしまい、また、作者が本来意図したものとは大分異なった作品が成立したということである。

次章では、このような「削除」のより具体的な様相を示すために、*O Lost* の「削除」箇所を、一覧表示風に、簡条書き風に記してみたい。これは地道で骨の折れる作業であるが、*O Lost* が、どのように *LHA* のテキストに変容していったか、その具体的なイメージを浮かび上がらせるためには必須の作業である。

第2章 「削除」の具体的様相

以下の記述では、主だった削除箇所——字句の削除という微細なものではなく、文章レベルの削除という目立ったもの——について、頁の順番どおりにしてゆきたい。また、削除箇所の頁数が一頁以上と多い場合は、原則としてコメントを加えるつもりである。削除箇所の頁数が一頁に満たない箇所でも（数行でも）、第1章で述べた「全体の構図」とかかわる場合、作品を読むうえで大きな違いをもたらす「削除」である場合、もしくは単に削除箇所のコンテキストや説明をわかりやすくするという目的で、紙数の許すかぎり、必要に応じて適宜コメントを加えることにしたい（なお、頁数と行数 [L] は、Thomas Wolfe. *O Lost* [Text established by Arlyn and Matthew J. Brucoli] に依拠している）。

*

(1) p. 5, l.22, One morning-----p. 8, l.15, barns

この部分の冒頭は、オリヴァー・ガントが兄ギルバートとともに、南軍の兵士がゲティスバーグに向けて進軍して行くのを見守るシーンから始まる。その後、物語内容の時間は逆行して、オリヴァーの父（ユージーンの子孫）ギルバート（オリヴァーの兄と同名）がイギリスからアメリカにやって来て、放浪の末、オランダ系の女性と結婚し家族を築き、死ぬまでの人生の物語が展開する。

この箇所は削除されており、*LHA* では祖父ギルバートの物語の短い要約が記されているだけである。それによって、読者の印象はだいぶ異なってくる。*O Lost* では、小説の歴史的背景である南北戦争が強く意識されるが、*LHA* では、歴史性は薄らぎ、個人の物語が強調されている。また、祖父の代の物語が詳しく描かれることによって、この作品が何世代にもわたる壮大な「大河小説」、「叙事詩的サーガ」であるという方向性が明確に

されるのである。そして、祖父ギルバートの放蕩ぶり、演劇的ふるまいのエピソードが詳しく書かれているので、祖父から父へと受け継がれる資質、系譜が明らかになり、「家の年代記」であるという作品の特性が強調されるのだ。その後 *O Lost* で詳述される母方のペントランド家の物語と組み合わせり、主人公ユージーンの血統、出自がより浮き彫りになる構造になっていると言えよう。そうすることで、物語の「大河小説的」、「サーガ的」特徴がさらに明らかになるのである。

(2) p. 8, l.20, The Englishman-----p. 35, l.7, bone

この箇所は、最も大幅に削除された部分である。この部分の物語内容にかんして、*LHA* ではごく簡単な要約が記されているだけである。オリヴァーがアルタモントの町に来るまでの物語は、*LHA* では早回しのフィルムのように一気に語られているが、*O Lost* では、細目にわたって、生き生きと具体的に語られている。

ギルバートが死んだ後のガント家の日々の生活（特に食事や労働の場面）が、*O Lost* では詳しく描かれる。とりわけ印象的なのは、ゲティスバーグの戦い（1863）である。ゲティスバーグの戦いに向かうリー将軍に、オリヴァーが水を差し上げる場面が、この箇所の中心部分をなしているが、ここではアメリカ史の大転換期の「歴史の足音」が聞こえてくるようだ。戦闘のシーンは描かれていないが、7月上旬に行われた激しい戦闘の大音響を、ガント家の人々が緊迫した様子で聞いている描写は、読者に戦争のすさまじさを実感させる。

オリヴァー・ガント（作品中では「ガント」という名で呼ばれている）の半生も、より詳しく描かれている。*LHA* では、彼がアルタモントにやって来るまでの物語は、ほんの少し言及されるだけであるが、*O Lost* では、故郷（ペンシルベニア州）を飛び出して自由になりたい少年の欲求、兄オリヴァーとの2人暮らし、石工としての修業、そして最初の妻シンシアとの

結婚生活が実に入念に描き出されている。しかも (*LHA* では削除されているが), *O Lost* では、オリヴァーの2度目の結婚が記されている。シンシアの死の直後、彼はふしだらな女性マギーと結婚するが、その不貞にさんざん苦しめられ、短い間に結婚は破局に終わるというエピソードが書かれている。オリヴァーとジューリア (エライザ) の結婚は、もともとは3度目の結婚であったのだが、マギーとの結婚のエピソードの削除によって、*LHA* では2度目の結婚ということに修正されているのだ。確かに、ユージーンを中心とする「教養小説」, 「芸術家小説」としての編集方針からすると、父親の物語の一エピソードの省略は妥当かもしれない。しかし、作者ウルフは、「一家の物語」として2代目オリヴァーの半生の細かい部分も描く必要があると感じていたのであろう。

長々と記してきたが、要するに、編集における上記のような最大級の削除により、作品の歴史性、時代性は薄らぎ、大河小説性、「サーガ的」特性も弱まってしまうということである。

さらに一つ、「政治性」について付け加えておこう。*LHA* では、政治的記述はほとんどしるされてはいないが、この削除箇所では、南北戦争後の政治的状況が具体的に記されている。「再建期」におけるグラント政権の政治的腐敗、「カーベットバグガー」(南北戦争後南部にやって来た「渡り政治屋」)によって支配された南部政治、ニューヨーク市政を牛耳る「ボス」政治、物議をかもしたヘイズとティルデンの大統領選挙のことが言及されている。これまで、*LHA* の「政治性」はあまり研究対象にされてこなかったが、それは、ウルフが政治的なことを書かなかったからではなく、パーキンズを主とした編集者たちが、原稿から「政治性」を削除したからなのである。

(3) p. 42, l.6, The Major----p. 42, l.22, verse

ジューリアの父であるペントランド少佐 (The Major) の吝嗇ぶりと家族

の貧窮（同時に彼の詩文好み）が記される。

(4) p. 42, l.26, At twenty-one-----p. 44, l.40, thought

ジューリアの兄（長兄）であるヘンリー・ペントランドの風貌と性格について詳しく書かれている。*LHA* ではペントランド家の言及は少ないが、*O Lost* では、ペントランド家の物語も詳しく記されている。

(5) p. 47, l.28, The lean-----p. 48, l.32, insane

オリヴァーがカリフォルニア、ルイジアナ、フロリダへ小旅行した記述がある。この箇所の後半では、19世紀末のクリーブランド大統領の時代、米西戦争のことが言及され、さらに、ジューリアの母の死、彼女の兄弟たちのその後の人生（ウィルとジムは材木商として成功する）が記される。

(6) p. 51, l.5, For-----p. 51, l.7, intent

(7) p. 52, l.21, He-----p. 52, l.27, drunkenness

この箇所には、過去に結婚した「3人の女性」のことが言及されているが、前述した箇所(2)で2度目の妻マギーのことは削除したので、整合性を有するよう、この数行も削除せざるを得ないのである。

(8) p. 62, l.5, What-----p. 62, l.19, lassitude

(9) p. 64, l.33, With-----p. 65, l.32, speech

赤児であるユージーンの見た世界が記述されている。幼児が言葉を獲得する以前の、分節化されていない混沌とした世界に様々なイメージの断片が去来する。

(10) p. 78, l.18, In 1904-----p. 78, l.23, Cincinnati

(11) p. 79, l.18, All-----p. 79, l.32, tasted

(12) p. 80, l.31, Excitement-----p. 80, l.8, him

(13) p. 87, l.35, All-----p. 88, l.29, men

ここでは、オリヴァーのキャラクターがさらに詳しく描かれている。また、この箇所には、彼が3人の女性と結婚したことが暗に示されているの

で、*LHA*（結婚は2回）の記述と矛盾しないよう削除されたのであろう。

- (14) p. 93, l.12, He-----p. 93, l.24, jest
- (15) p. 98, l.2, You-----p. 93, l.25, a-vid-it-ee
- (16) p. 102, l.38, Once-----p. 103, l.12, earth
- (17) p. 103, l.30, Like-----p. 103, l.35, tread
- (18) p. 104, l.12, Eugene-----p. 104, l.15, stable
- (19) p. 104, l.19, And-----p. 104, l.33, fixed
- (20) p. 106, l.39, Meanwhile-----p. 107, l.2, Dixieland
- (21) p. 108, l.12, All-----p. 108, l.26, Jews
- (22) p. 108, l.32, The Jews-----p. 108, l.37, colonize

(18) , (19) は、性的な描写があり、削除されている。

(21) , (22) は、特にユダヤ人や黒人に対する差別表現が目立つ箇所。

- (23) p. 109, l.34, All-----p. 110, l.6, curse
- (24) p. 112, l.19 To the side-----p. 112, l.24, Niggertown
- (25) p. 114, l.25, When-----p. 114, l.29, duckpond
- (26) p. 115, l.20, Another-----p. 115, l.30, chivalry

ユージーンが読んだ中世の年代記作者フロワサル（1325-1400年のあいだの英と仏を主とした年代記を書いた）についての言及がある。

- (27) p. 117, l.40, You-----p. 119, l.11, Dick

ここは、ユージーンが幻想の中で、乙女を救う英雄に己を重ね合わせている場面。*LHA* にもこの種のエピソードは見出され、ユージーンのロマン主義的傾向を示しているが、*O Lost* ではさらに多く見出される。

- (28) p. 121, l.34, Or-----p. 121, l.39, eyes
- (29) p. 123, l.32, Or-----p. 124, l.21, India

この箇所は、ユージーンが図書館で乱読した様々なジャンルにわたる本のリストが百科全書的に列挙されている。*O Lost* では、この箇所が削除さ

れていないので、その直後の（LHAで削除されていない）、オリヴァーの言葉“*He's read everything in the library by now*”の意味内容がより明確になる。

(30) p. 129, 16, And-----p. 129, 112, conviction

(31) p. 129, 120, Eugene-----p. 129, 137, alone

(32) p. 130, 118, grew-----p. 130, 127, he

(33) p. 137, 19, We-----p. 137, 112, Gant

(34) p. 144, 113, In summer-----p. 145, 16, lands

ユージーンが父と映画館に行き、はじめて映画『トロイの陥落』（“*the Fall of Troy*”）を観たことが記されている。彼の映画体験は、「カーニバルの魅惑に麻痺したように、映画の奇跡を初めて目の当たりにした」と表現されている。

なお、『トロイの陥落』を監督した、ジョヴァンニ・パストローネ（*Giovanni Pastrone, 1883-1959*）について、『世界映画大事典』（岩本憲児・高村倉太郎編、日本図書センター、2008年）は以下のように説明している。「イタリアのサイレント黄金時代を代表する監督。（中略）ピエロ・フォスコの変名で『トロイ陥落』*La caduta di Troia* (10)をはじめとする史劇を演出。なかでも、移動撮影を先駆的に使用した『カビリア』*Cabiria* は、イタリア史劇の金字塔として諸外国に多大な影響を与える……。」また、イタリア映画は1910年代前後、世界で大成功をおさめ、アメリカでもブームであった。この事情・経緯については、ジョルジュ・サドゥール『世界映画全史』第5巻（丸尾定ほか訳、国書刊行会、1995年）の第4章「イタリアの黄金シリーズ」と第8章「イタリア映画の大詰め」に詳しく書かれている。

(35) p. 145, 135, Eugene-----p. 146, 120, women

ユージーンの都市に対するロマン的憧憬が記されている。これはウルフのほとんどの作品をつうじて見られる傾向である。また、文学に書かれた

都市についての百科全書的な記述が続く。

(36) p. 149, 1.14, Two-----p. 149, 1.29, daring

(37) p. 150, 1.16, From-----p. 157, 1.30, food

ここは、*O Lost* のなかでも、かなり削除されている部分である。それは、ペントランド家の人々についての詳細な記述である。*LHA* では、「ユージーン・ガントを中心とする小説」という編集方針上、ペントランド家の物語は「脱線」にあたるので削除されたのだ。しかし、ウルフは、もともとはペントランド家の物語を描こうとしていたのであり、その意図からすれば、ここにペントランド家の人々の「その後」の人生、軌跡が描かれていても不思議ではなく、物語の進行のうえで論理的整合性を有している。

特に、ジューリア (*LHA* ではエライザ) の兄ウィルの一家の物語が詳述されている。なかでも、ウィルの妻ペットの、意地の悪い、偽善者ぶった性格が、風刺的に、カリカチュア的に誇張されており、作中でも暗示されているように、ディケンズ的世界を思い起こさせる。小間使いの子供たちを庇護しているように見せかけて、実際にはひどく虐待し、あげくは、その子供のうちの一人に毒を盛られ危うく死にかけるというエピソードが記され、悲喜劇的世界が描かれている (*O Lost* の「悲喜劇性」全般については、すでに Scott Dill が “W. O. Gant and the Restraint of Laughter” [*The Thomas Wolfe Review*, 2006, Vol.30] において論じている)。

トマス・ウルフは、自己中心的で主観的な傾向がきわめて強い作家と思われがちであるが、この削除された部分を見ると、対象を突き放した、アイロニーに満ちた世界を描くのが実に巧みであることがわかる。

(38) p. 158, 1.19, For-----p. 158, 1.25, brain

(39) p. 172, 1.31, Upon-----p. 172, 1.34, night

(40) p. 173, 1.3, The children-----p. 173, 1.22, faces

(41) p. 173, 1.36, Son-----p. 174, 1.1, rancor

ここまでは、*LHA* の Part I を形成する部分のオリジナル原稿 (*O Lost*) にかんして見た、削除箇所である。次に、*LHA* の Part II を形成する部分のオリジナル原稿について、削除箇所を検討してゆこう。

(42) p. 182, 1.40, In-----p. 183, 1.3, square

(43) p. 183, 1.6, He-----p. 192, 1.26, cigarettes

ここは、一見すると大幅に削除しているように思われる。しかしながら、この部分のほとんどは、*LHA* の Part I の第7章に用いられ（移行して）いる。それは、オリヴァーがカリフォルニアへの大旅行に出かけ、数週間後にアルタモントに帰ってくる場面である。それゆえ、実質的には、この箇所はほとんど削除されていないということになる。この箇所のうち実質的に削除されている箇所といえば、p. 187, 1.13, This-----p. 188, 1.10, estate（アルタモントの町、建物の詳しい描写）と p. 192, 1.13, This-----p. 192, 1.26, cigarettes の2ヶ所であり、これらは *LHA* の Part I、第7章には用いられていない。

(44) p. 202, 1.14, The earth-----p. 202, 1.31, whistle

アルタモントの様々な人々の家屋や振る舞いが描写されている。

(45) p. 203, 1.35, He-----p. 208, 1.36, coffee

この部分の多くは、アルタモントの住人の一人、ウェブスター・ソンドレイ (*LHA* ではウェブスター・タイロー) の描写に当てられている。アルタモントに住む人々の多様性を示すうえで、たしかにこの描写は必要であろうが、小説中さほど重要な役割を有していない人物であるため、長すぎる記述は削除されたのであろう。

また、この箇所の終わりには、アルタモントの町全体を俯瞰した壮大な

絵図がくりひろげられている。アルタモントの地形学的特徴、その周囲の豊かな自然……。これら壮大なパノラマの中に、住人たちの人間ドラマがくりひろげられる様子が印象づけられるのだ。ウルフの意図した、スケールの大きな大河小説にはじつにふさわしい自然描写である。

(46) p. 210, 1.19, No one-----p. 213, 1.11, water

アルタモントの住人（フィリップ・ローズベリー、ヴァイオレット夫人ら数人の人間群像）が描き出されている。

(47) p. 218, 1.28, Because-----p. 218, 1.41, therefore

(48) p. 219, 1.10, O inevitable-----p. 219, 1.20, Texas

ここには、‘Chance’（偶然、めぐりあわせ）によって、人間は破滅することも救済されることもあり、人間の運命はいかようにも左右されるという哲学的テーゼが記されている。

(49) p. 222, 1.18, But-----p. 222, 1.23, idle

(50) p. 223, 1.6, Jim Pentland-----p. 223, 1.13, business

ジューリア（エライザ）の兄弟であるウィルとジムが商売に成功し金持ちになっているということが書いてあるが、ペントランド家の物語ゆえに削除されている。

(51) p. 223, 1.29, As-----p. 224, 1.4, American

(52) p. 224, 1.19, In later-----p. 224, 1.26, mediocrity

(53) p. 224, 1.28, Simon-----p. 225, 1.30, staff

(51) ---- (53) はいずれも大富豪についてのエピソード。特に (53) は、ユージーンが直接会ったサイモンという大富豪の物語の前半部である。サイモンの物語の後半（五十歳以降）は削除されず、*LHA* に記されている。

(54) p. 233, 1.38, Orange-----p. 234, 1.14, tears

(55) p. 236, 1.41, That day-----p. 237, 1.6, poetry

この箇所は、レナード夫妻の経営する塾に通うことになったユージーンに、新たな世界がひらける（特に、レナード夫人という「精神的母」に出会い、文学の世界にめざめ、引き込まれてゆく）ことを予示するような部分である。

(56) p. 240, l.16, John-----p. 243, l.37, history

これはレナード夫妻の小伝であるが、彼らの過去の履歴はほとんど削除されている。

(57) p. 248, l.39, Anabasis-----p. 249, l.3, ——（この箇所は—— [ダッシュ] で終わっている）

(58) p. 251, l.29, Finally-----p. 251, l.21, wig

レナード校長のカツラの話。生徒たちがレナード氏のカツラをはずすことなど、いたずらを思い描いているユーモラスなエピソード。

(59) p. 257, l.11, Will-----p. 257, l.14, strange

ウィル・ペントランドがYMCAなどに毎年寄付するほどお金持ちになっていることが書かれている。ペントランド家のエピソードゆえ削除。

(60) p. 260, l.6, Julius-----p. 260, l.32, somewhere

レナード夫妻の塾に通う、少年ディックとウィルについてのエピソードなどが書かれている。

(61) p. 260, l.40, The family-----p. 261, l.6, girls

(62) p. 261, l.20, Badgered-----p. 261, l.23, envious

(61)、(62)は、ユダヤ人の少年マイカラブの家族のエピソード、および少年たちの彼に対する差別、いじめの詳細が書かれている箇所である。

(63) p. 262, l.14, He-----p. 262, l.26, getting in

(64) p. 263, l.16, Julia-----p. 267, l.29, lands

ここには、ユージーンと母ジュリア（LHAではエライザ）のワシントンD.C.への旅行の記録がしるされている。

2人は、ちょうど合衆国第28代大統領ウッドロー・ウィルソン（1913-21）の就任式（第1期）が行われるときにワシントンにやってきたのであり、就任式（現在は1月だが当時は3月）を実際見ている。現在、就任式は広場「モール」に向かって議事堂（キャピトル）で行われるが、当時は議事堂の正面玄関のほうで行われた。正面玄関へつうじる通りを埋めつくす人々の様子が、*O Lost* では、克明に記録されている。しかも、就任式に向かう前大統領タフトと新大統領ウィルソンが車に同乗している光景、タフトの顔の色まであまりにも詳細に描かれているので、臨場感がある。

ユージーンとジュリアは、その後、ワシントン・モニュメント（その内部の様子も含めて）、コーコラン美術館、議事堂、ジョージ・ワシントンの邸宅マウント・バーノンを見学している。特に、ユージーンは、議事堂を前にして「古代ローマ」のような栄光を感じ、体のすみずみまでアメリカという国家の偉大さを感じ取り、アメリカの政治的伝統を思いおこしている。ここは、*O Lost* の中でも最も政治色の強いシーンである。繰り返すが、ウルフは政治的な事は書いているが、パーキンズらによってほとんど政治性は排除されたのである。逆説的な言い方をするなら、パーキンズらの「編集の政治学」は政治を排除することであった。

(65) p. 280, 1.6, For-----p. 280, 1.26, beg

ユージーンの姉メイベル（*LHA* ではヘレン）の親友パール・ハインズの人物像。パールは自由と冒険を好み、メイベルも一時期その影響をつよく受ける。2人は、短期間ではあるが、デュオとして歌手活動を行いアメリカ各地をめぐる。

(66) p. 286, 1.5, Demon-----p. 286, 1.13, pleasure

ユージーンの兄フレッド（*LHA* ではルーク）の車の運転技術の巧みさ。

(67) p. 286, 1.34, They-----p. 287, 1.14, shall not

「南部」を擬人化した美しく官能的な散文詩。

(68) p. 299, l.13, Or-----p. 301, l.23, you

ユージーンは、父と週に何回も映画を見に行っていたが、行くたびに、映画に登場したヒーローに自分を重ね、自分をヒーローとする物語を夢想した。この削除された箇所も、そうした夢想の一つ。

(69) p. 317, l.27, The clank-----p. 317, l.28, stool

(70) p. 321, l.17, The opinion-----p. 322, l.31, yet

新聞配達少年たち（ユージーン仲間）が、週ごとに（性的対象として）訪れるある黒人女性にかんする言及。

(71) p. 328, l.2, caught-----p. 328, l.2, thighs

性行為を描いた部分（1行）が削除されている。

(72) p. 328, l.21, Julia-----p. 329, l.3, there

建設業者のドークという人物が、アルタモントの町を再開発しようともくろみ、ホテル建設などを行っている。目ざといジューリアは、そうした開発途上の町の土地をいくつか購入し大儲けしようとしている。

(73) p. 329, l.39, Her-----p. 330, l.37, exterminated

LHA では、主としてマーガレット・レナードは理想化されているが、ここでは、彼女のピューリタニズム的抑圧や地方主義的偏狭さが批判されている。

(74) p. 337, l.20, The English-----p. 339, l.22, orders

ユージーンは、イギリス文学における「食」にかんする記述を好んで読んだ。ここには、イギリス人は「食」にかんする最も優れた記述、言説をおこなっている国民だという賛辞が記されている。

(75) p. 341, l.22, They-----p. 345, l.10, rancor

フロリダに旅行したジューリアは、そこで兄のウィルと出会い、親密に語り合う。彼女は、ウィルの妻ベットと仲が悪く、ベットは2人の兄弟の仲睦まじい語らいから締め出されたような形になっている。こうしたベン

トランド家の事情はすべて削除されている。

(76) p. 347, l.14, In a world-----p. 348, l.19, was

フロリダに旅行している母が不在の間、ユージーンは、母が経営する「デイクシーランド」でロイ・ブロックという人物と同室になる。この部分では、ブロックの人物像が記される。

(77) p. 351, l.24, Miss-----p. 353, l.5, eyes

クリスマス休暇に、姉エフィー（*LHA* ではデイジー）の住むサウスカロライナに旅行するユージーン。

(78) p. 355, l.31, Let's-----p. 362, l.5, poor

(79) p. 362, l.13, Jack-----p. 363, l.29, that

(78) , (79) は、レナードの塾に通う少年たちが、アルタモントの町を歩き回りながら会話している部分。ここは、ジョイスの『ユリシーズ』に大いに影響された部分であり、古今の詩句が allusion (引喩) としていたるところにちりばめられている箇所である。幸い、この少年たちの町歩きの場合で、*LHA* では削除されている *O Lost* の部分について、allusion の出典について調べた労作 (Arlyn Bruccoli, "An Argument for an Annotated Edition of Thomas Wolfe's *O Lost*" [*Thomas Wolfe Review*, 2004, Vol.28]) があるので、詳しくはそれを参照のこと。

(80) p. 374, l.9, There-----p. 374, l.27, Happy

この部分の直前に、ダン教授の「英米二大国民の統一」という論が展開されており、この箇所はそれに関連した記述。

(81) p. 384, l.5, They-----p. 384, l.24, Keats

第一次世界大戦が勃発し、アメリカにも好戦的気分がみなぎるなか、戦争に対する熱狂と興奮をうたった散文詩的文章。

(82) p. 384, l.30, O God-----p. 386, l.5, diverge

海を越えて、ヨーロッパで起きている戦争との関連で、ユージーンは夢

想の中でロンドンに思いをめぐらせている。

(83) p. 386, l.24, It's-----p. 387, l.34, knife

愛国心に満ち溢れたユージーンが、出征し、英雄的行為のさなか戦死する兵士としての自分を夢想する場面。

(84) p. 388, l.2, a little-----p. 388, l.39, her

ユージーンの子ベンがプリム (*LHA* ではパート) という名の女性と話しているシーン。プリムはベンの恋人である。

(85) p. 393, l.37, Eugene-----p. 394, l.26, Beyond

ボウデンという人物の葬式の場面。そこでユージーンは、「死」について思いをめぐらせる。

(86) p. 399, l.14, Because-----p. 399, l.14, off

(87) p. 399, l.26, I-----p. 399, l.27, true

(88) p. 399, l. 29, You-----p. 399, l.33, obediently

(89) p. 400, l.34, They-----p. 401, l.10, did

マックス・アイザックとユージーンが、15歳で飲酒禁止にもかかわらず、18歳と偽って酒を飲んでいるシーン。*LHA* が出版された1929年は、「禁酒法」が制定されていた(1920年施行、1933年廃止)ので、編集者は、このシーンは法的にも道徳的にもふさわしくないと判断したのであろう。

(90) p. 419, l.5, Jesus-----p. 419, l.5, poured

(91) p. 419, l.11, Standing-----p. 420, l.4, Packard

アルタモントで大洪水が起こったが、*O Lost* では、そのすさまじい様子が具体的に詳しく書かれている。また、被害を受けたペントランド家の人々も、この場面に登場している。

以上(42) --- (91) が、*LHA* の Part II を形成する部分のオリジナル原稿 (*O Lost*) にかんして見た、削除箇所である。続いては、*LHA* の

Part IIIを形成する部分のオリジナル原稿について、削除箇所を検討してゆきたい。

(92) p. 426, l.21, As-----p. 426, l.41, way

ユージーンは、州立大学に向けて出発する日が近づくにつれて、興奮が高まるばかりである。またこの時期、ユージーンの身体は成長し、すっかり大人びて見えるようになった。

(93) p. 429, l.26, The university-----p. 429, l.40, dissolved

ここは短い重要な部分である。ノースカロライナ州立大学の歴史がコンパクトに記されている。要約すると以下ようになる。「この大学は、アメリカでもっとも古い州立大学である。アメリカ独立革命の数年後に創立され、南北戦争のときには学生全員が出征した。南北戦争の荒廃から復興した後、今では千人弱の学生を擁し、創立以来もっとも栄えた状態にある。しかも、古き南部の独特の雰囲気をつたよわせている。」

(94) p. 430, l.25, The university-----p. 430, l.33, studied

大学の学部構成（法律、医学、美術等・・・）、学生の構成（南部人の比率など）についての説明がある。また、この大学には優れた学者、教師がいるのに、学生が勉強しないのは残念だと辛辣なことも書いてある。

(95) p. 431, l.7, Eheu-----p. 432, l.21, again

新入生が先生や先輩らに、様々なスローガンを吹き込まれ、大学に入った目的等様々な質問をされる、オリエンテーションのような期間についてのエピソードが書いてある。新入生は、「南部人としての名誉」を守るよう説諭され、厳しい規律を課されている。そして、講義においては、分厚い本を配布され、「現代デモクラシーの諸問題」、「未来の試練」、「リーダーシップ教育」などを教え込まれる。

しかし、それを聞いているユージーンが眠気を覚えているという描写に

より、こうしたスローガンやメッセージの形式ばった、ステレオタイプ化されたありさまに、批判が向けられている。この箇所に限らず、*O Lost* の削除された箇所には特に、語り手が対象から距離をおき、冷やかに眺める風刺的描写が多い。こうした、*O Lost* の風刺性については、John L. Idol, Jr. が詳しく分析している (“Muting the Satirist : The Satire of Thomas Wolfe’s *O Lost*” [*South Carolina Review*, 36 : 2, 2004])。この論文の中で、Idol もすでに、「編集によって最も削除されがちな文章こそ際立って風刺的だ」と指摘している。

(96) p. 434, l.16, The chemistry-----p. 435, l.13, adequate

ここには、ユージーンが、化学が不得意であり数学にも興味がわかないという記述がある。高名な化学の教授が、実験をする時、バーナーに火をつけることもできないという（イロハも知らない）描写は笑いを誘い、風刺的である。

(97) p. 434, l.32, He-----p. 434, l.41, bellies

(98) p. 439, l.31, For-----p. 440, l.3, more

(99) p. 442, l.33, The latticed-----p. 442, l.34, whores

おそらく、「売春婦」(whore) という言葉を含むみだらな詩であるゆえに削除されたのであろう。

(100) p. 442, l.37, He-----p. 443, l.3, Gants

ユージーンが初めて娼婦のいる場所へ向かう時の罪悪感が描かれている。

(101) p. 445, l.22, She-----p. 445, l.24, vest

(102) p. 445, l.25, The woman-----p. 445, l.39, wipings

ここは、かなり具体的に性行為が描写されているため削除されている。

(103) p. 446, l.1, Stolid-----p. 446, l.1, said

(99) から (103) まで、削除された部分を読むと—1929年に出版された *LHA* には、性描写はあまり見出されないが—オリジナル原稿ではかなり

具体的に、性描写が記されていることがわかる。

(104) p. 449, l.39, They-----p. 450, l.27, time

娼婦に性病をうつされ、医師グリーン (*LHA* ではマクガイアー) のところに治療にやってきたユージーンにたいし、グリーンは、古今、神話的な歴史的な人物をはじめすべての人間は、肉欲にまみれてきたのだと語り、ユージーンを慰め元気づける。

(105) p. 450, l.33, See-----p. 451, l.15, brother

(106) p. 454, l.18, Five-----p. 456, l.15, bitter

大学の食堂での食生活について詳述。さらには、「食」にたいする讃歌も記される。

(107) p. 457, l.4, Upon-----p. 457, l.33, varnish

農学部、工学部の建物がある、大学の西側の様子が描かれている。また、うねるような土地の中にある大学の地形学的特徴が記される。

(108) p. 459, l.5, He-----p. 459, l.34, dead

ユージーンが、第一次世界大戦のさなか、戦争について (親フランス的な、反ドイツ的な) 詩を創作したことが記されている。

(109) p. 471, l.38, Hugh Barton-----p. 472, l.22, house

ユージーンの姉メイベル (ヘレン) の夫ヒュー・バートンの仕事および性格についての記述。

(110) p. 503, l.2, Eugene-----p. 505, l.26, him

ユージーンは、サウスカロライナに住む姉エフィー (デイジー) のもとを訪ねる。エフィーは幼少時からピアノが巧みであった。彼女はユージーンの前で、パデレフスキの「メヌエット」を弾く。これは、ユージーンがゆりかごで寝ていたとき、生まれてはじめて聞いた音楽であった。彼は、この曲を聞いて、姉と仲のよかった昔を追想し、幼い心にはちもどり、感動の涙を流す。プルーストを思わせる美しい場面である。デイジー (*O*

Lost ではエフィー) は, *LHA* では目立たない存在であるが, *O Lost* ではかなり重要な役割を与えられている。

なお、ポーランドのピアニスト、作曲家、政治家（1919年には独立したポーランド共和国の首相まで務めた）パデレフスキ（1860-1941）は、アメリカ各地で演奏し、アメリカで没した。同国人ショパンの全集を編纂したことも知られる。この場面で演奏される「メヌエット」は、『6つの演奏会用ユーモレスク Op. 14』（1887）に収められた名高いピアノ曲「古風なメヌエット ト長調」であり、軽快なリズムを特徴とする4分ほどの小品である。この曲について、『ピアノ作曲家 作品事典』（中村菊子・大竹紀子著、ヤマハミュージックメディア、2003年）は、以下のように解説している。「優雅な旋律で始まり、続くセクションでは左手のオクターブ、右手の即興的なパッセージなど、華麗な技巧がみられる。」

(111) p. 509, l.31, A handsome-----p. 511, l.32, idea

戦時下での軍事教練、学長の愛国的演説、学生たちの好戦的な思想が記される。これによって、さらに小説の歴史的背景が浮かび上がる。

(112) p. 513, l. 31, He-----p. 514, l.2, liar

エルク・ダンカンという人物のポートレート。

(113) p. 514, l.31, But-----p. 517, l.9, he

ハロルドという名のユージーンのルームメイトのポートレート。これは、かなり詳しい人物伝という趣があり、ハロルドの家族のポートレートも記されている。

(114) p. 519, l.33, The life-----p. 523, l.8, applause

ノースカロライナ州立大学の学生の特徴は、「都会的な文化とはほとんど接触がなく、簡素である」とまとめてある。また、スポーツが強いばかりか、演説でも賞をとるような大学であると述べている。ユージーンの具体的な演説の例も、長々と引用されている。

(115) p. 531, l.38, He-----p. 532, l.21, away

酒に酔いつぶれたユージーンが、ベッドに横たわり、己の泥酔ぶりを、罪悪感をいだきつつ思い起こしているシーン。

(116) p. 547, l.6, That night-----p. 563, l.15, sleep

これは、*O Lost* の中でも、かなり大幅に削除されている所である。また、削除された部分は、*LHA* の p. 516---p. 519 で簡単に要約されているだけである。ユージーンがヴァージニア州の南東の港町ノーフォーク、あるいはその周辺地域に放浪の旅に出かけ、そこで日雇い労働者（主に、軍の飛行場の建設）として働くエピソードである。この地では、多国籍、様々な階級の人々が群れ集う。このエピソードは、一つの短編小説として独立させてもいかなりの長さであり、灼熱の気候、街の活気あふれる様子、多種多様な人間模様が実にリアルに描かれる。なかでも、労働者仲間のスティンカー・ジョーダンの性格描写が傑出している。自堕落で、金銭にルーズなところが度をを超えており、喜劇的である。この人物は、トマス・ウルフが造型した人物の中で最も個性的な人物のうちの一人であろう。

(117) p. 568, l.27, Eugene-----p. 570, l.39, wept

引き続き、ユージーンの前夜における労働のエピソードが描かれる。また、この箇所の後半には、彼とイタリア女性との濃密で激しいラブシーンが描かれているが、この性描写はすべて削除されている。

(118) p. 615, l.27, Two-----p. 615, l.27, passed

O Lost は、(117) のあと、字句の削除を除けば、p. 615 までほとんど削除されていない。この削除されていない部分には、作品の最大の山場である「ベン之死」の場面が描かれているので、編集者たちはほとんどそのままに残したのであろう。

(119) p. 619, l.22, He-----p. 619, l.29, wench

(120) p. 622, l.18, The vast-----p. 622, l.19, pageantry

(121) p. 623, l.11, As-----p. 626, l.6, Eugene

この削除された部分を読んで、読者の多くは驚きを禁じえないだろう。解剖学教室に入ったユージーンが、ホルマリン漬けの「死体」をながめているうちに、自分がかつて性交渉をもった女性の死体を見出すというエピソードが描かれている。LHA では、このグロテスクなシーンはすべて削除されている。

(122) p. 628, l.39, As-----p. 638, l.5, all

ユージーンの大学での輝かしい学業、課外活動について詳しく書かれている。

まずは、彼がヴァージル・ウェルドン教授の「論理学」の講座で提出したレポートが受賞したというニュースが記されている。

第二に、彼は大学においてすでに有名人であり、他の学生によってプライベートな行動までチェックされるほどの存在になっている。

三つ目は、ユージーンの文学の師であるランドルフ・ウェア教授の人物像が描かれ、ウェルドン教授と双璧をなす人物とされている。彼は、「イギリス人よりもイギリス文学を知っている」と賛辞を送られている。

最後に、ユージーンの演劇活動について。ユージーンが民衆劇“The Return of Jed Servier”を書いているという記述は、ウルフが実際書いた「民衆劇」“The Return of Buck Gavin”をふまえている。そしてここでは、ユージーンより才能の乏しい、「不器用で荒っぽい、子供じみた、真に迫っていない」劇を書いているハントという学生が、メディアに取り上げられ評価されていることが徹底的に批判されている。これは、批判というよりも、劇作家として挫折したウルフ本人の憤懣やるかたない怨嗟の気持ちの表れなのであろう。

(123) p. 656, l.38, He-----p. 657, l.35, seavalves

これは、ユージーンが想像の中で、巨人的な、神のような俯瞰する目を

有し、地球全体を眺め渡すというヴィジョンである。これから、世界に向けて旅立ってゆく（また、世界全体をこの目で見てやろうという壮大な野望をいだけ）ユージーンを予感させる象徴的な一節である。

(124) p. 658, l.14, Then-----p. 659, l.21, August

ここでは、ユージーンの巨人的なヴィジョンは、アメリカの北部の都市（特にボストンとニューヨーク）を幻視する。それは、これからハーヴァード大学のあるボストンへ、そして彼が大学教師として暮らすニューヨークに向けて旅立ってゆくことを予示するシーンである。

(125) p. 659, l.37, Yes-----p. 660, l.37, dreamed

ここでは、ヨーロッパの都市（とりわけパリ）がヴィジョンの中にあらわれている。ユージーンがアメリカからヨーロッパに向けて旅立ってゆくことを予示するシーンである。

(123) , (124) , (125) を読むと、トマス・ウルフが、*O Lost*（そして *LHA*）の最終章を、これからの旅（*Of Time and the River* の世界）を予告する章として考えていたことが、より明確になるのである。

第3章 終わりに——全体の構図の補足

さて、具体的な削除の様相について、以上くわしく検討してきたが、それをもとに、あらためて全体の概略について、二、三気づいたことを補足して本稿の締めくくりとしたい。

第一に、*LHA* は、歴史的背景とは切り離された私的な小説のようなイメージが強いが、*O Lost* には、歴史的背景の言説が豊富である。南北戦争、再建期、世紀末の情勢、ウィルソン大統領の就任式、第一次世界大戦など、随所に描きこまれている。*LHA* では、第一次世界大戦以外、歴史的背景がほとんど削除されている。

第二に、「家の変容の物語」ということにかんして言うなら、ガント家

の系譜は削除された部分が少ないが、ペントランド家の系譜はほとんど削除されてしまっていることである。しかし、ウルフはもともと、ペントランド家の人々についてもかなり詳しく記述しており、*O Lost* を読む者は、ウィルやペットなどの個性的で印象深い人物を、あたかも直接会ったかのように生き生きと思い描くことができる。ガント系列の人物は（ベンを例外として）素直で熱情的で野放図なタイプが多いが、ペントランド系列の人物は偏奇で冷やかで計算高いタイプが多く、それらがコントラストをなして、小説に立体感と、深みと、多様性を与えている。

第三に、削除によって、統一感が生まれ、しかも、冗長なまでに多方向へと拡散しかねない作品に歯止めをかけていることも事実である。重要な人物について不必要なまでに延々と語り、ユージーンのロマン的幻想について果てしなく記述し、旅の記録を長々と書き連ね、大学生活の細目について際限なく事実を次々と付け加えてゆくことによって、小説はしばしば美的統一感を欠き、完成度が低くなるのだ。しかし、それにより、ノーフォークの旅におけるスティンカー・ジョーダン、ウィルの妻ペットのような強烈に個性的なキャラクターが排除され、あるいは矮小化され、小説としての面白みが減少してしまう。また、大学生活のリアリティーが減少し、アルタモントの描写に比べて、チャペル・ヒルの描写が精彩を欠いたものとなることも事実である。同時に、大学生活の描写から、様々なジャンル形式（演説、戯曲、哲学的対話）などを削除してしまうと、豊饒な、ポリフォニックな文学空間が失われてしまう。それに加えて、冗長になりがちな作品を、「はさみと糊」方式で荒々しく削除したことにより、作品の論理的整合性、一貫性がいちじるしく失われてしまうケースがある。ペントランド家の人物が作品の随所で唐突に姿を現すのも不自然であり、ノーフォークのエピソードでなぜユージーンがひどく肉体的に疲弊しているのか、実感しにくくなるのである。とはいえ、こうした欠点を考え

に入れても、作品があまりにも冗長で、退屈で、未完成になることを極力回避しようとしたパーキンズらの努力は一定の評価を受けるに値するであろう。

第四に、巨視的な、パノラマ的な自然描写の多くが削除されてしまっていることである。アルタモントの近景と遠景がともに描かれてこそ、文学空間の立体性と絵画性が増し、人間の有限なドラマと、自然の無限なドラマがコントラストをなして、宇宙論的な壮大な空間が現出する。また、アルタモントの洪水の場面のように、実際の自然の猛威が克明に描かれてこそ、それがいかにすさまじいかりアリティーを伴って実感され、自然の力の前では無力な人間存在のはかなさと悲しみ、災害とたたかい人命を救助しようとする人々の勇気、災害に屈せずなんとか耐えぬき、生き抜いていこうとする人間の意志の強さ、等を感じとることが可能になり、文学的世界の迫真性と思想性が感じとられるのである。

*

以上、補足的な点をいくつか付け加えたが、今回のオリジナル原稿 (*O Lost*) 研究は、「削除された部分」というほんの基礎的な部分についてチェックしただけであり、細かい修正、字句の削除、新たに書き加えた箇所等についてふれることは紙数の関係上できなかつた。また、それらを小論で網羅的に検討することは、筆者の能力に余ることである。ただ、冒頭で述べたように、こうした基礎的な研究は、日本においてほとんどなされていないので、本論考における地道な確認作業も、意義を有するものであると筆者は確信している。さらに、細かい部分については、稿を改めて論じたいと思っている。

* 本論文で使用したテキストは以下の通りである。

・ Wolfe, Thomas. *O Lost: A Story of the Buried Life*, The original version of *Look*

Homeward, Angel, Text established by Arlyn and Matthew J. Bruccoli,
(University of South Carolina Press, 2000).

・ Wolfe, Thomas. *Look Homeward, Angel* (Charles Scribner's Sons, 1929).